

ハフハフハー

「ちがいが」があるから生きられる

1年 Y・Kさん

ぼくは、この本をよまえば、ハプの子どもがブハーがドクという「わるいところ」をもっているから、みんながこわがってなかまに入れてくれないのだとおもっていました。だから、じぶんではむりをしていても、がまんしていいことをいわなかったり、わるいところをおさえこんでしまえば、ブハーもみんなからうけ入れられて、ともだちになれるのだというおはなしかとおもっていました。ぼくは小さいころによんだ、「まっくらネリノ」というえほんにしているとおもったけれど、さいごまでよんだら、すごいちがっていました。

ブハーにドクがあるのは、ルリカケスがいいうように、「わるきがない」ことで、どうぶつたちがそれをこわがるのも「わるきがない」ことなのだとも思います。なぜなら、ハプがドクをもっているのは、生きるためにひつようなとくちようだからです。だから、ドクのあるにせんをしてふさいでしまうと、ブハーはからだのぐあいがわるくなってしまう。おとなになったブハーは、ドクがあるのは「わるいこと」だともわなくなつて、ほかの生きものと「ちがうだけ」なのだとかんがえるようになります。ほかのどうぶつとなかよくあそぶことはなくなつても、おたがいにありのままのすがたでいることで、ちきゅうでいっしょに生きられるのだとも思います。

ぼくのかよっていたようちえんでは、かねこみずさんの「わたしことりとすずと」のうたをよくうたっていました。そのうたには、「みんなちがってみんないい」というかしがあります。「ちがう」ことは「わるい」ことではなくて、「いい」ことなのです。

ことしのなつやすみ、ぼくはとみ田きょういち先生の「きょうりゅうはいまでも生きている」というじゅぎょうをききにきました。そして、もともとは、は虫のいの中にきょうりゅうのいや、ちようのいがかくまれていることをしりました。だから、ハプも、ルリカケスも、「いのちはみんなつながっている」のだとおもいます。ぼくは、は虫のいが手だったけれど、先生がかっているトカゲやヘビをなでてみることできました。ぼくとブハーの「ちがいが」は、大むかしにはおなじいのちのつながりだったかもしれないし、ちがいがあからうそ、きょうりゅうのようにせつめつせず生きていられるのかもしれないとおもいました。